阿蘇の植生と景観

戸田 義 宏*

Vegetation and Landscape in Aso

Yoshihiro Toda

1. 阿蘇の概略

その昔、九州は海によって2つに隔てられていたが、約30万年前の海中大爆発によって一つになり、その後、現在の阿蘇カルデラが形成される7万年前までに、数万年間隔で大火砕流噴火を起こしている（大噴火は4回とされている）。その際生じた火山灰や熔岩による影響は大で、九州東北部一帯の直径200km内に、厚い所では100m以上、平均50mもの堆積物をもたらしたと推定されている。このため地下のマグマ溜りは空洞化し、陥没が起こりカルデラが生じ、水がたまってカルデラ湖が形成されている¹⁷⁾。

水と四季の変化に富み、毎年多くの観光客の訪れる宮崎県の高千穂峡や熊本県の蘇陽峡・内大臣峡などの100m以上の見事な断崖は、阿蘇の誕生がもたらした火砕流

による堆積物を、川が長年月かけて深く侵蝕したものとされる¹⁾。

「緑の扉風」あるいは「緑のナイアガラ」¹⁴⁾とも形容されるカルデラの壁は東西の内径17km、南北の内径24km、周囲128kmのほぼ楕円形で、標高約900m（東側）から680m（西側の二重峠）でその大きさは世界最大級である。この阿蘇外輪山のほぼ中央には、東から西に向かって根子岳（1408m）、高岳（1592m）、中岳（1506m）、鳥帽子岳（1337m）、杵島岳（1321m）などの中央火口丘群が連立し、阿蘇の五岳（その山なみが、仏の眠る姿に似ていることから涅槃像ともいう）と言われる。典型的な二重火山である阿蘇は、周知の通り大小数ヶ所の噴火口を持つ中岳が、現在もおも鳴動音とともに噴煙を吐き続けており、時にはストロンボリ現象を示したり、大爆発

図-1 阿蘇の概念図

*九州東海大学農学部

写真－１．阿蘇外輪山と阿蘇谷の一部を俵山より望む

写真－２．根子岳と高岳（涅槃像の顔と胸）、阿蘇谷

を起こし、火山灰や火山ガスによる影響を周辺に及ぼしている。

阿蘇外輪山は（図－１）、２本の活断層から成る立野火口瀬で、熊本平野に向かってプツリと断ち切れ（神話では、阿蘇大明神の健甞龍命が蹴破った跡と伝える）、約１万年前にカルデラの湖水は流失したと言われる。その後露出した火口原には現在、３町３村に約５万人の人々が生活を営んでいる（阿蘇外輪山台地一帯を含む阿蘇郡は６町６村から成り約８万人が住んでいる。尚、北外輪山上の大観峰付近には約３万年前の縄文人の生活痕が見られている）が、北外輪山と阿蘇五岳の間に広がる一帯を阿蘇谷、南外輪山と阿蘇五岳の間に広がる一帯を南郷谷と呼んでいる（写真－１、２）。

気候は高地性で、年平均気温 $12^{\circ}\text{C}\sim 13^{\circ}\text{C}$ （阿蘇山上 9.7°C ）、年間降水量は $1800\text{mm}\sim 2200\text{mm}$ （阿蘇山上 2750mm ）。地質は全地域火山灰土質で、内輪地帯は輝石安山岩、外輪山台地は火山碎屑で覆われており、土壌は阿蘇火山碎屑堆積物に由来する黒色火山灰土壌である²⁾。

火山特有の地形や緑とともに景観形成の一要素に水があるが、水源を阿蘇に発する主要河川は、白川、菊池川、緑川、筑後川、五ヶ瀬川、大野川の６水系が放射状に流れ出ており、阿蘇は“九州の水瓶”となっている。

２．阿蘇の景観

ゴウゴウと地軸をゆるがすような地鳴り、数十万年の昔より地底から噴煙を吐き続け、時には真っ赤な火柱を見せ、火山灰・火山ガス・火山弾を神の怒りの如くまき散らし、山肌を黒褐色に塗りつぶす阿蘇は“火の山”と恐れられつつも壮大な自然のパノラマと自然のもたらす豊かさを至る所で展開している。

景観には、自然の姿そのままの状態が維持されている自然景観と人為的影響の下に育まれてきた文化景観があるが、阿蘇の景観を考察するには、第一に太古の時代から続く火山活動によって造られてきた特異な地質・地形などによる景観、第二に特異な造山活動と歴史の中に維持・育成されてきた植物など生きた自然による景観、第三に音、光、色、水など自然の無機的要素と動植物の織りなす生態系の中に、長い年月を経て形成されてきた人間の心理的要因と活動が構築する精神的・文化的景観があることを念頭に置く必要がある。

阿蘇の景観を構成する前述の３つの要素について、それぞれ主なポイントを列記すると、世界最大級のカルデラ（外輪山の内壁に囲まれ、かつてカルデラ湖の底であった火口原は、ほぼ平坦で前述のように今では田園景観を呈している）、数百メートルの高さに及ぶ外輪山内壁、外輪山台地に広がる高原、阿蘇の五岳、寄生火山と言われる米塚、外輪山の一角をなし旧阿蘇火山群の名残りと言われる俵山や鞍岳、生き物を寄せつけまいとする暗褐色の火山荒原・砂千里ヶ浜、それとは対照的に水を浅くたたえ青空の陽光に輝き生命の息吹を与える草千里ヶ浜、北外輪山の押戸石山の巨石群（古代オリエント文明の文字であるペトログラフが発見されている）や南外輪山の獅子ヶ岩、らくだ山に代表される奇石・奇岩・奇山、白川水源・池山水源をはじめ数々の湧水に端を発する川の流れによる浸蝕が造り出した渓谷、冬季に水の芸術を見せる古閑の滝、秋の紅葉を映す数鹿流ヶ滝、鮎返りの滝、湯煙りをあげる温泉の数々。

次にこれらの地質・地形の上に成立する緑のヴェールは、土地の標高・傾斜方向・傾斜の度合・土壌の質・気象条件などの要因に規制を受けつつ個々の群落や大草原、森林など阿蘇の特異性を示しながら様々の植物社会を形成し、動物と共に生態系を築き、独特の相観を呈している（詳細は後述）。

数万年前、おそらく縄文時代あるいはそれ以前の昔より、阿蘇の地を生活の場として住みついた人間は自然の驚異の中に神（自然）への祈りを捧げ、特異な地質・地形と生物を利用し、自然景観を文化景観へと変貌させながら営々と歴史を積み重ねてきており、精神的な心のよりどころあるいは象徴として一陽来復を祈る祭り事など季節を彩る田園文化や神話・伝説を生み出してきている。すなわち、農耕の歴史を基礎とした心理的要素を背景に

精神的・文化的景観をも培ってきていると言える。

阿蘇に春の訪れを告げるのは、白雪の中に黄金の花姿を見せるフクジュソウそしてダニ等の害虫駆除や草原の維持更新を目的として実施される3月下旬の野焼き、さらに阿蘇神社で行われる「田作り祭り」である。この祭りは「御前迎へ」と称し、歳神が妃神を迎へ入れる、いわば神婚式を演ずる儀式で、茅束に火をつけ一斉に振り回して豪快に夜空を焦がす「火振り神事」である⁸⁾。往生岳や大観峰付近など大草原の山肌を、暗闇の中に真赤に染めてなめつくす炎も、人と炎が一体となって祈りを捧げる神事も人々に温もりと感動を与える一大ページェントとなっている。

7月下旬には、神々が稲の生育を見て回る「御田祭り」(阿蘇神社)が行われる。緑なす田園の中に繰り広げられる白装束のうなり、早乙女、田楽、田作男、田作女、牛頭などの行列絵巻と田歌、青空高く響く太鼓の音は、まさに農業神にふさわしい⁹⁾。この後、8月19日から15歳未満の少女を火焚き殿の忌み小屋にこもらせ60日間、昼夜絶えずに火を焚かせる「火焚き神事」(霜神社)もある。

阿蘇ではこの外、長野神社の岩戸神楽をはじめ多くの祭り事が実施されており、祭りごよみにこと欠かない。

このように多様性に富む自然景観と文化景観、それらを生活に深く織りこみ格調の高い精神文化を育んできた阿蘇の大自然は、火山学や地質学などの科学者を生み出すだけでなく、いろいろな文学や芸術を生み出す場ともなっている。日本史最大の謎の女性「卑弥呼」を描いた手塚治虫原作・市川崑監督による「火の鳥」をはじめ「日本誕生」「里見八犬伝」「空の大怪獣ラドン」など多くの映画ロケーションの場として阿蘇が選ばれるのも天地創造を思わせる景観や大自然のパノラマ、多くの景勝地、温泉等を有しているからであろう。

3. 阿蘇の植生

今回は、阿蘇の景観を特徴づける植生として、火山荒原、ミヤマキリシマ、草原、森林に分けて述べることにする。

(1) 火山荒原

火山活動を続ける中岳の火口周辺は、火山灰・火山ガス・火山弾、時には流出する熔岩などの影響を強く受け殺伐とした荒涼たる火山荒原となっている。この火山荒原の中で最も火口近くに見られる植物は酸性土壌に強いイタドリで、火口の縁には小さい株として点在する。火口から遠ざかるにつれコイワカンスゲ、キリシマノガリヤス、カリヤスモドキが出現する。砂千里ヶ浜周辺ではコイワカンスゲの半球状群落やイタドリの小丘状群落が分布し特異な景観を呈している。また、阿蘇山上西口駅広場周辺の火山荒原と接する位置にはミヤマキリシマを

中心とした山地風衝草原(鈴木1961)が出現する。

古くには、火山活動の休止期や静穏期の存在も知られており、火口の極く近傍まで腐植土の発達した層が見られることから、植生の回復していた時期があったと推定される。現在の阿蘇スキー場から山上広場にかけての平地には、かつて鎌倉時代から室町時代にかけて37坊があり多くの修験者の生活の場であった記録もある¹⁾。

(2) ミヤマキリシマ

荒涼たる火山荒原とは対照的に、毎年5月下旬から6月上旬にかけてピンクの花のじゅうたんを敷きつめたかのように花色を競うツツジ科ツツジ属の常緑低木であるミヤマキリシマは、九州の阿蘇、雲仙、久住、霧島の各火山の高地にのみ自生する¹⁸⁾。

宮脇ら¹¹⁾は、九州の海拔1200mをこえる火山性の山頂部の風衝地には、ミヤマキリシマ、ノリウツギを特徴的に混える草原が発達している。この草原はミヤマキリシマ、ノリウツギ、マイヅルソウ、ツクシゼリ、コイワカンスゲを標徴種としてマイヅルソウ・ミヤマキリシマ群落にまとめられるとしている(写真-3)。

写真-3. 仙酔峡とミヤマキリシマ、根子岳の一部

阿蘇では、仙酔峡の標高840m付近から中岳の山場広場、杵島岳、鳥帽子岳の頂上付近に至る一帯にまで数十万株が自生している。平面的にみるとミヤマキリシマは火口より約200mから約2100m離れた地域まで分布している(阿蘇カルデラ形成より古いと言われる旧阿蘇火山群の一つである鞍岳山頂にはわづかながらミヤマキリシマ群落が特異的に存続している)が、火山活動が平穏になるなど影響が小さくなるにつれてヤシヤブシやノリウツギ、アセビ等が混入、伸長し、ミヤマキリシマの生長を抑制するようになる。従って、時折り活発化する火山活動で噴出する火山灰や火山ガスは、ミヤマキリシマの害虫駆除の役割を果たすとともにヤシヤブシやアセビなどの侵入、生長を妨げている。抵抗性の強いミヤマキリシマは枝葉を枯死させることもあるが、やがて勢力を増し、群落の維持・拡大が可能となる¹⁹⁾²⁰⁾。

(3) 草原

行けど萩行けど薄の原廣し 夏目漱石
すすきのひかりさえぎるものなし 種田山頭火

阿蘇特有の火山地形とともに、4万5千haに及ぶ壮大な草原景観は阿蘇の魅力の一つであり、富士山系の草原等と並ぶものである。

鈴木・阿部⁶⁾ (1959) は、九州中部のススキ・ネザサを主体とする草原は、海拔高度がちがっていても组成的には均質であって標徴種および識別種による群集区分は困難であるとし、結局、優占種によって次の5つの植生群に分けている。

第1群 (ススキ群) : 阿蘇中央火口丘東部、外輪山東方の波野高原

第2群 (ススキ・ネザサ群) : 阿蘇中央火口丘の北および南の斜面、外輪山では南側の高千穂野

第3群 (ネザサ群) : 一番地域を占めるもので、中央火口丘西側斜面、外輪山全域

第4群 (ネザサ・ワラビ群) : 外輪山南東部の馬見原に至る街道の周辺

第5群 (ワラビ群) : 集中的に現れる傾向にある。外輪山内南斜面、南北外輪山の一部

阿蘇一帯に見られるススキ草原はヤブツバキクラス域 (常緑広葉樹林帯) からブナクラス域 (夏緑広葉樹林帯) にかけて分布しており、宮脇¹⁰⁾¹¹⁾ (1976, 1981) はこのススキ草原は特徴的にネザサを混生する二次草原であり、ネザサ、カワラマツバ、ススキを群集標徴種および区分種としてネザサ・ススキ群集にまとめられ、群落高0.3mから1.5mでススキ、ネザサ、トグシバが高い植被率で優占し、火入れ・放牧・採草などの頻度を増すことによって群落高0.2mで根系を延ばすシバ草原に移行している。人の出入りや放牧の影響を強く受けている草千里ヶ浜のシバ草原はその典型の一つである。一方、ネザサ・ススキ群集など二次草原は、人為的干渉の程度を低下あるいは停止することによってクズ、ヤマヤナギ、カシワ、タラノキ、アキグミ、コナラ、ナガバモミジイチゴ、アセビ、ミヤマキリシマなどツル植物や夏緑低木類などを混生あるいは優占するマント群落への遷移がみられる。

また吉良 (1952, 1958) は、阿蘇地方のススキ、ネザサ、シバの草原が異なる家畜密度のもとでそれぞれ平衡関係にあることを指摘し、ススキ草原は牛が1ha当たり0.5頭以下で維持され、ネザサ草原は年0.5~2頭/haで平衡、シバ草原は牛1.5頭/haで平衡になると報告している¹²⁾。

阿蘇外輪山台地の草原は、西の方向より時計回りに石原野、端辺原野とそれから北の方向すなわち久住山の裾に位置する瀬の本高原への広がり、さらに東の方向の波野原から祖母・傾山系に接する山東原野、南外輪山

写真-4. 端辺原野のススキ

写真-5. 端辺原野の牧草地、根子岳を望む

へ広がる一帯と緑の大海原を形成している (写真-4, 5)。

中でも、北外輪山台地の端辺原野には数多くの湿地が存在し、本州以西では最大規模の低層湿原と言われる。佐藤¹⁶⁾ (1987) は、端辺原野の数百ヶ所の湿地の植物相を探索し、70種の湿地性植物をあげ、大陸と朝鮮との共通種が56%、阿蘇の固有種が20%、南方系が9%だったとしている。

また、瀬井¹⁷⁾ (1988) は、山東原野 (南北約17km, 東西約16km, 標高350mから1488m, 平均標高約800mでなだらかな起伏を伴う高原) の植物相を詳細に調査し、阿蘇固有の植物ハナシノブ (写真-6)、ツクシマツモト、アソカラコウ¹⁸⁾をはじめ大陸系遺存植物79種をあげている。

阿蘇草原の特徴および重要性は、ヒメユリ、ケルリソウ、オグラセンノウ、キスミレ、ハルリンドウ、ヤツシロソウ、アソノコギリソウ、シオン、ヒゴタイなど大陸系 (満州・朝鮮) 遺存植物とハナシノブなど阿蘇固有の種を包含する植物資源の宝庫となっていることである。

今江・村岡³⁾ (1981) および今江⁴⁾ (1986) は、「阿蘇の草原は、気候など自然の制限要因によって成立しているものではない。この地域は——中略——人為極盛相と

写真－6．阿蘇の固有種ハナシノブ

しての草原が維持されているものである」と述べ、阿蘇の草原は、本来は森林が極盛相となるべき姿だとしている。また、瀬井¹⁷⁾は、「——火山灰層は、約一万年前に降黒ボク土がほとんどである。黒ボク土は草本植物が腐食してできたものと考えられており、森林性の土壌とは明らかに違いがみられるという。現在阿蘇周辺はほとんどの地域が黒ボク土におおわれていることから考えると、約一万年前から現在まで、草原状態のまま移行してきたのではないと思われる。——」とし、その原因として火山灰の降下、一万年前からの人為的影響も否定できないとしている。

火山性土壌は、一般に酸性が強く、アロフェンを多く含み磷酸吸収係数の値が高いことから植物の生長は阻害され、森林の発達を拒むところがあるが、後述するように外輪山台地にはカシワの木やクヌギ林が点在している所もあり、部分的にはよく発達した森林が見られる。阿蘇は気象条件にも比較的恵まれていることから、火山草原や水湿地などの特殊環境を除き、草原も含めて人為的影響を及ぼさなければ森林へと移行する可能性が高い。

採草地の「野焼き」いわゆる火入れは隔年に行われるのが基本となっており、3月下旬に実施される。やがて焦土の中にキスミレやオキナグサ、ワラビ等が出現し、緑一色に覆われた6月下旬頃、「くれなずむ みそらに浮ぶ 君の名よ」に應えるかのように、夕暮れの空にユウスゲの花が素朴な姿を見せ、米塚をはじめ草原一帯に淡い黄色の彩りを添える²⁰⁾。

採草地の「干し草刈り」すなわち刈草は、野草が繁茂した年の9月下旬頃から実施され、天日で乾燥後、結束して「草こずみ」に積みあげられ秋から冬への点景を描く風物詩ともなっている(写真－7)。

特筆すべきことは、時折り火山活動に伴い、火口近く

写真－7．晩秋の点景「草こずみ」

にピンクから赤色のススキの穂が出現し特異な景観を示すことである。この異常赤色を呈するススキの現象は、霧島山系えびの高原では毎年8月下旬から9月上旬にかけて見られる現象であり、土壌中のアロフェン、ススキに含まれる植物色素の一つアントシアン、火山ガスに含まれる二酸化イオウ、雨や霧など水分の関与することが明らかにされている¹⁹⁾。阿蘇中岳では、火山灰や火山ガスを大量に噴出し、周辺の農作物などに被害を与えた1984年の大きな活動直前、8月下旬から9月にかけてこの現象がみられススキの外にリンドウ、クリシマノガリヤス、チカラシバ、トダシバなど14種の植物が異常赤色を呈している²¹⁾。

(4)森林

カルデラ内の火口原は、耕地化され田園が広がり、集落にはタブノキ、モミノキなど自然植生の残存木、イロハモミジ・ケヤキ群集の断片などが溪谷ぞいや屋敷林、斜面林の形で残されている¹¹⁾。外輪山の内壁のほとんどはスギ・ヒノキの植林により占められ(写真－8)、社寺林の一角には樹齢数百年のスギのみられる所もある。また、南外輪山の内壁の一部にはクヌギやケヤキなどの落葉樹林もみられる。

人為的影響が少なく自然のままの森林がある程度の広

写真－8．北外輪山内壁のスギ・ヒノキ林

がりをもって残されている所に、立野火口瀬の阿蘇北向谷原始林、南外輪山内壁の狼ヶ字土・清水、西外輪山斜面深葉の菊池川水源の溪谷と鞍ヶ岳・矢護山の西向き急斜面、中央火口丘東端に位置する根子岳、東外輪山の通称らくだ山周辺から高森峠に至る一帯があげられる。

大陸系の遺存植物が多い草原に対し、森林には九州の脊梁山地や四国・紀伊半島と共通する、いわゆる襲速紀要素（熊襲・速水瀬戸・紀伊の一字づつをとった略語で、それぞれ九州・四国・紀伊半島を指し、この地域内またはこの地域を中心として分布する一群の植物をいう）と呼ばれるヒカゲツツジやナツツバキ等の日本固有種やヒマラヤ、中国本土との共通種が多く見られる^{4) 7)}。

なかでも阿蘇の西の玄関口である通称北向山（阿蘇北向谷原始林として昭和44年8月に国指定天然記念物となっている）は、人里から最も近くにある自然林としてよく知られ、ヤブツバキクラス域のイスノキ・ウラジログシ群集として学術的にも貴重とされている。約84haの広がりの中に常緑広葉樹のウラジログシ、アカガシ、タブノキ、スダジイ、イスノキなどが高木層の樹冠を形成し、林内にはヤブツバキ、カゴノキ、アオキ、サカキ、シロダモ、クロガネモチ、ヤブニッケイ、カクレミノなどが生育している。日射量が少ない北斜面とくに谷部ではケヤキが高木層に混生する。さらに500mをこえる頂上付近の尾根筋には、アカガシの優占する高木層があり、ウラジログシ、ヤマボウシ、カヤ、ミヤマシキミなどが生育している^{10) 11)}（写真-9）。

一方、南阿蘇外輪山の標高800m前後からブナクラス域の夏緑広葉樹林となり、外輪山内壁の狼ヶ字土・清水ではミズナラやブナ、クマシデが高木層の樹冠を形成し、林内にはコハウチワカエデ、ヤハズアジサイ、サワグルミ、

写真-9. 阿蘇北向谷原始林

スズタケ、サワリソウ、ケイビランなどがみられる。

中央火口丘は火山活動と人為的影響を受けており、自然の森林が残されているのは、天狗岩をはじめとする岩峰が鋸の歯のようにそそり立ち、四方に大きな急勾配の谷が発達している根子岳だけである。山麓は標高800～1000mまでが草原になっており、自然林はそれ以上の標高の谷を中心に発達している。地形が急峻で岩場が多いため樹木の生育はよくないがヤマヤナギ、ヤシャブシ、ノリウツギ、アセビ、ミヤマキリシマ、ヤマアジサイ、ナナカマド、コハウチワカエデ、ナツツバキなどがみられる外、貴重な植物が分布している³⁾。

西外輪山斜面に位置する菊池溪谷は、菊池川上流の溪谷両側斜面約7kmにわたって存在し、質・量ともに豊かな森林と清流の景観は深山幽谷の趣が深く、新緑・紅葉など自然に触れる行楽地として親しまれている³⁾。この良質の残存林分はヒメウワバミソウ・ケヤキ群集^{5) 10)}に位置づけられ、溪谷下部のヤブツバキクラス域ではウラジログシ、ツクバネガシ、シラカシ、イヌガヤ、モミなどの常緑樹にイロハカエデ、クマノミズキ、ケヤキ、エドヒガン、カツラなどの落葉樹の大木を混生している。溪谷上部のブナクラス域ではイタヤカエデ、ミズナラなど夏緑広葉樹の占める林分となり、草原化している端辺原野に続いている（写真-10）。

写真-10. 菊池溪谷の水と緑

4. 四季と景観

阿蘇の大自然は、植物社会学的に2つの植生帯、ヤブツバキクラス域（常緑広葉樹林帯）とブナクラス域（夏緑広葉樹林帯）を有し、その間に草原を展開している所が多い。内容的には大陸遺存植物や日本古来の襲速紀要素である固有種を含み、人為的文化景観の背景として四季を彩る植物の要素を十分に持っている。

外輪山内壁の一部や根子岳内輪の約800m以上の所は夏緑広葉樹が分布し、晩秋から冬季にかけて周辺のスギやヒノキ植林の緑と対照的なコントラストを形成する。北向山などでは、4月から5月にかけて桜前線が麓から

山頂部に向かって上昇し、10月から11月にかけては紅葉前線が斜面を下降する。

阿蘇における“自然のこよみ”は、枯れ草の山肌を舐める炎の舞いに始まる。丘の背に、ワラビ、ゼンマイ、ウドそしてタラノキなど、若草や木の芽を摘む人の姿、静寂の中に草を食む阿蘇のアカ牛、「逆光のなかの まばたき 阿蘇に 美貌の 馬が 棲む」³⁹⁾(安永1990)と詠まれた牧歌的風景、徳富蘇峰の名づけた北外輪山上の大観峰(古くは遠見ヶ鼻)に舞うハングライダーと見おろす火口原に広がる田園景観、山水画を思わせるアカマツと獅子ヶ岩、銀白のススキの穂波、紅葉の彩り、やがて阿蘇の大地は緑の衣から黄褐色の衣へと冬の装いを急ぎ、霧水や樹水の咲く白銀の世界に眠る。

阿蘇の大自然は、様々な景観を視覚に訴えながら、今なお鳴動する地の響き、ウグイスやキジそして遠くの森に聞くカッコウの声、せせらぎや滝の音、ドングリが落葉を叩く晩秋と音の風景・景観、さらに折りの景観を重ねる。

作家の光岡明⁹⁾は「——どこもここも、言語に絶する。四季、気候、朝昼晩、そして人の気持ちの持ち方によって変わる彩りに、ことばが追いつかないのだ。多くの人は、その前に無口だった。——中略——、無口である方が阿蘇のような大自然に向かっては、正しいのである。実に、阿蘇に立つ以外にないのである。

それでも人は感動を伝えたい。感動が大きければ大きいほど、伝えたい意思もまた大きい。——」と述べている。

今回、私はペンを執った時点で「阿蘇」が、私の前にあまりにも大きく、深く、偉大であることを思い知らされた。軽率にも「阿蘇の植生と景観」について書き述べることに事欠かないと思った。確かに書き述べる材料は紙面が不足する程あるかも知れない。しかし、それはただ単に阿蘇における様々な事象を列挙するにとどまり、とうてい、雪・月・花、春夏秋冬、朝昼晩どこもかしこも、そしていつの時にも覚える感動を表現しうるものではない。

まさに、阿蘇を知るには、黙って、阿蘇のどこかに立つ以外にないのである。

5. 課題と対策

近年、高度経済成長に伴い地域開発の波は全国各地に押しよせ、自然あるいは昔ながらの農村景観そして自ずとそこに育まれるはずの自然を見つめる優しい思いやりのある心と感動は失われつつある。

豊かな自然、変化に富んだ景勝地、数多くの温泉に恵まれた阿蘇は、昭和9年12月、国立公園第2次指定により阿蘇国立公園の指定を受け、行楽や保養を目的とした観光客が毎年5百万人以上、国内外より訪れている。

しかし、阿蘇においてもこの数十年の間に、緑に覆われていた山肌の一部は露骨に岩肌を見せ、心ない人による植物の盗掘、セイタカアワダチソウやオオブタクサなど帰化植物の侵入、スギ・ヒノキの植林、大型機械を用いた企業型リゾート開発等が進み、貴重な植物や言語に絶する素晴らしい景観は次第に損われてきている。

ヨーロッパでは1960年代から余暇開発の一担として田園が注目を集め、農村での生活環境の景観整備や交通アクセス改善が急ピッチで進められ家族でゆったりとした旅と滞在を楽しむ空間として、国家助成により緑深い田園は確かに美しく蘇った。しかし、1990年代初めから都市市民の過度の入り込みによって、田園地帯の自然環境への負荷が生態系破壊につながる懸念、景勝地の居住者の社会環境が攪乱されるなどの困難に直面している。さらに農業をとりまく国際環境の激変は農産物の生産だけでなく田園景観維持に大きな打撃を与えている⁴⁰⁾。

阿蘇の山林原野の約66%は入会地であり、畜産を営む入会権者は、自らの農業の位置づけとともに阿蘇の自然の維持という大きな役割を担ってきている。

那須¹²⁾(1993)によると、平成になってから繁殖牛飼養農家戸数が毎年200戸程度づつ減少しており、組合単位の牧場利用戸数も毎年10～50戸減になっているという。

働き手の高齢化と過疎化が進み、さらに畜産物自由化による打撃は畜産業の経営悪化をうみ、その結果、多くの恵みを与えてきた原野の維持が危機に瀕している。一部では原野が大根畑に変わり、作付けされた大根畑の傾斜地は土壌流失が著しく、表土が流失し、道路や排水溝、小河川や砂防ダム等に堆積し、災害や事故の可能性すら出てきている¹³⁾。1990年7月阿蘇を襲った集中豪雨、翌1991年9月、風による莫大な被害をもたらした台風19号のツメ跡もまだ生々しく二次被害の生じる可能性もある。

熊本県では稀少生物保護にのり出し、「熊本県稀少野生動植物の保護に関する条例」を制定(平成3年4月1日施行)し、平成4年度までに阿蘇にみられるサクラソウ、ヒゴタイ、ツクシフウロ、ヤツシロソウ、ツクシマツモト、ヒゴシオン、ハナシノブの7種の植物とオオルリシジミの保護にのりだしている。

また、「阿蘇はひとつの思い」で、阿蘇郡の12ヶ町村と熊本県が一带となって財団法人「阿蘇環境デザインセンター」を設立し、自然の保護と開発などに関する国際シンポジウムや種々の討議を重ね、自然と人との共有できる村や町づくりを目指している。

さらに、阿蘇の壮大な自然を舞台に、自然との共生をテーマにした新しい田園型リゾートを目指す“グリーンストック”運動が、佐藤誠熊本大学教授を中心に始動している。巨大資本を投下して、農地を買収し一大レジャーランドや観光開発するリゾートではなく、新しい希望の営みとして、都市市民と力を合わせて豊かなグリー

ンストックを大地に加え、そこに共に自己実現をめざす美の産業＝生命開発としての余暇開発を実現したいとしている¹⁰⁾。このような農地保全型開発の試みは、阿蘇だけでなく保護と開発の中での新しいあり方として注目される。成功を祈りたい。

幾多の問題はあるが、自然そして景観、環境の維持には、EC諸国の美しい農村景観の維持に例をみるように住民・行政・企業のパートナーシップ、生産者と消費者、場の提供者と利用者の相互理解と協力が不可欠である。

引用文献

- 1) 荒木精之(1991): 阿蘇: 第4回熊本県民文化祭阿蘇実行委員会, 1-67
- 2) A S O '93 (1993): 阿蘇郡の概要 '93: 熊本県阿蘇事務所, 1-17
- 3) 今江正知, 村岡節雄(1981): 阿蘇の植物便覧: 熊本県, 87pp
- 4) 今江正知(1986): 火の山に生きる植物: ガーデンライフ, No. 7, 16-22
- 5) 熊本県(1980): 植生調査報告書: 第2回自然環境保全基礎調査, 1-43
- 6) 熊本県畜産会(1988): 高原地帯草地の特異性とその利用, 3-11
- 7) 熊本記念植物採集会(1969): 熊本県植物誌: 長崎書店, 18-20
- 8) 熊本日日新聞社編集局(1987): 新・阿蘇学: 熊本日日新聞社, 73-128
- 9) 光岡 明(1992): 神の国・阿蘇: 阿蘇時事通信社, 86-89
- 10) 宮脇 昭ら(1976): 熊本県西部の植生: 運輸省第四港湾建設局, 熊本開発研究センター, 26-34
- 11) 宮脇 昭ら(1981): 日本植生誌・九州: 至文堂, 98-294
- 12) 那須利八(1993): 阿蘇地方の草地畜産の現状と課題: 日本草地学会九州支部会報, No. 1, 20-25
- 13) 沼田 真(1973): 草地の生態学: 築地書館, 75-93
- 14) 佐藤 誠(1993): 阿蘇グリーンストック: 石風社
- 15) 佐藤武之(1986): 故郷・阿蘇への想い: ガーデンライフ, No. 7, 15-16
- 16) 佐藤武之(1987): 新・阿蘇学: 熊本日日新聞社, 123-125
- 17) 瀬井純雄(1988): 山東原野における大陸系遺存植物の分布: 昭和63年度熊本県科学教育研究生研究報告, 5-19
- 18) 戸田義宏(1969): ミヤマキリシマ: 霧島山総合調査報告書, 176-182
- 19) 戸田義宏(1969): ススキ: 霧島山総合調査報告書, 193-196
- 20) 戸田義宏(1991): 火山活動のミヤマキリシマへの影響: 阿蘇中岳噴火に伴う降灰現象が阿蘇くじゅう国立公園の植生に与える影響の緊急調査報告書, 自然公園美化管理財団, 33-58
- 21) 戸田義宏, 権太恒正, 高山秀造(1991): 阿蘇における火山活動と植物について: 九州東海大学情報開発センター研究所報告, 15-24
- 22) 戸田義宏(1992): 「阿蘇の四季」によせて: EV-ERGREEN, Vol.1, 7
- 23) 安永落子(1990): 緑の風: 新阿蘇幻影: 熊本日日新聞社, 18